

56年前のこんな写真も出てきました。



発行人
〒104-0052
東京都中央区月島3-15-9
中島康夫
TEL 03-3534-0666
編集者 中島康夫
TEL 090-8005-9762

浅野内匠頭の墓前に東映スター総結集 昭和30年東映5周年記念映画「赤穂浪士」



- キャスト
- 立花左近・・・片岡千恵蔵
 - 大石内蔵助・・・市川右太衛門
 - 堀田隼人・・・大友柳太郎
 - 浅野内匠頭・・・東千代之介
 - 小山田庄左衛門 中村錦之助
 - 堀部弥兵衛・・・薄田研二
 - 堀部安兵衛・・・堀雄二
 - 小林平七・・・加賀邦男
 - お仙・・・高千穂ひづる
 - きち・・・田代百合子
 - 夕霧太夫・・・千原しのぶ
- 他
東映社長 大川博
- (上の写真に写っているスターの方々)

(財)中央義士会では、今年8月25日、設立当初の書類・史料・写真などが帰ってきました。その中に、昭和30年代の東映の写真が入っていました。現在、全義連事務局長の中島は、忠臣蔵との出会いは正に、この映画でした。

全義連事務局長 中島康夫

大石内蔵助の本心

中央義士会常務理事 萩原 栄

歴史の定説については、新たな史料の発見がある
とそれによってひっくり返ることがある。ところが、
新たな発見もなく、先人達が検証してきた史料を
読むこともせず、築き上げてきた定説を無視し覆す
方々がいる。特に忠臣蔵の史実については、これま
で百年以上かけて、多くの碩学が作り上げてきた
歴史を無視し、根拠のない「説」を作り上げ、おま
けにそれが面白おかしくマスメディアで流されてい
る。

その中の一つに、大石内蔵助が討入りを決心した
時期がある。内蔵助は討入りする気はなかったとか、
堀部安兵衛にせつつかれて元禄十五年七月二十八日
の円山会議で初めて決心した、などという話しが溢
れている。最近では、谷口眞子氏が平成二十二年十
二月国立劇場の「仮名手本忠臣蔵」プログラムの
中で、
「内蔵助は御家再興運動を行っており、討入りは
念頭にはなかったようである」「討入りは、安兵衛
が頑強に主張しつづけたにもかかわらず、当初はほ
んど賛同者もいなかったわけだが、後世には内蔵
助を中心とした一大プロジェクトとして伝えられ
た。これは、討入りが語り継がれることを予想して
さまざまな手を打った、内蔵助の行動によるところ
もあるのだろうか」

と主張されている。内蔵助は討入りの意志は無

く、安兵衛に促されてやっと討入りを決心した、し
かも、内蔵助がさまざまな手を打って、自分を中
心として討入ったように見せかけたのだというの
である。

内蔵助の討入り決定の時期については、先人達は
皆、元禄十四年四月の赤穂城引き渡しの際には決
めていた、と結論付けており、現在はそれが定説と
なっている。

ここでは当時の手紙や堀部安兵衛の残した手記な
どから内蔵助がいつ討入りを決心したか、また内蔵
助の考えはどのようなものだったのかを、史料を年
代順に史料を追って明らかにする。

「刃傷事件から赤穂城引き渡しまでの史料」

内蔵助が討入りを決めた初期の考えが現れる史
料は、堀部武庸筆記（*）である。これは堀部安
兵衛が元禄十四年四月から元禄十五年六月までの
自分の考えや、大石内蔵助らと交わした手紙類をま
とめたものである。

*「近世武家思想」岩波書店1974年11月25日

安兵衛ら三人は、江戸を出発し元禄十四年四月
十四日に赤穂に到着した。三人は十四日と十五日に
内蔵助と会って話しをしている。

ここで、内蔵助は、

「先此度は内蔵助に任候へ。是切には不可限、以
後之含も有之候」

と三人に言っている。この言葉で、籠城して討ち
死にするか、主君の意趣を継いで上野介の首をと

るべきと主張していた安兵衛、高田郡兵衛、奥田兵
左衛門の三人は納得し、城明け渡しを確認して四月
二十二日に赤穂を発ち江戸へ帰った。安兵衛らは内
蔵助が上野介の首をとることを言っていると理解
したのである。

「城明け渡しから内蔵助の第一次東下りまでの史
料」

江戸に帰った三人は、一ヶ月もたない内に、内
蔵助に早く上野介を討つため、江戸へ来るよう催促
を始めた。

それらの手紙に対して内蔵助も返事を何通か出
しているが、その中に元禄十四年七月十三日付の手
紙がある。

一部を抜粋する。

「於赤穂面談にも申候通、此上は大学様御安否之
様子次第、存念可申談覚悟に御座候。御安否承り不
届内には、何様之存念有之候共、御為宜様にと幾重
にも心底を尽し可申候」

これを現代文にすると、

「赤穂で会って話した通り、大学様の安否次第で
吉良上野介を討ち取る覚悟。安否が分からない内は
どのような存念があっても、大学のためになるよう
に十分に注意をし、早まっつてはいけません」

赤穂で会って話した通り、というのは四月十四、
十五日の話し会いである。大学の安否次第では存念
を遂げると言っている。安兵衛らが早く上野介の
首を取るよう手紙で言ってきたことに対して、
安兵衛らの存念があっても早まっつてはいけません、と

返しているのである。内蔵助がこの手紙で言っている存念とは上野介を討取るという意味なのである。この後も内蔵助は、存念、存立、一儀などの言葉を使い、直接、首を取るとか討入る、という言葉は使っていない。直接的表現を避けているのである。

同時期に内蔵助は遠林寺祐海に大学が人前になれるよう、幕府に働きかけることを頼んでいる。その元禄十四年七月二十二日付の手紙の中で、

「大学様ご安否の儀 赤穂にても申し候通り ご閉門急にご赦免まで願ひ候事にては毛頭これなく候 一つにてもご免の節 首尾よく人前もなされ候 ように ご面目もこれあり候段願ひ申す儀にござ候 いかような品にても 吉良氏勤役にて 大学様とおならべ置き候ては 大学様人前成らざる事に候 (中略) 吉良殿恙がなき所は大学様ご安否次第と存じ候」

内蔵助は、大学が人前になるための条件を2つ挙げていいる。一つは大学が閉門を解かれ江戸城に出仕することであり、もう一つは、上野介が幕府からならんかの処分を受けることである。大学と上野介が共に江戸城に出仕するようでは人前ではない、そして、はつきりと上野介が無事でいられるかどうかは、大学の安否次第だ、と言っているのである。つまり、大学が人前にならなければ上野介を討取ると明言しているのである。

安兵衛らはこの後も、内蔵助に何度も討入り決行催促の手紙を出している。それに対して、内蔵助は早まった行動に出ないよう、一所懸命に押さえよう

としている。元禄十四年十月五日付の内蔵助から安兵衛宛てた手紙で次のように言っている。

「人前も成り、面目も在之首尾に罷成、文公も立申品に成行候得ば、縦我々出家沙門之身に罷成候ても、不及是非事に候。此意味を以前廉も申遣候き。兎角安否次第之事、時節相待候はば善悪相知可申事に候」

文公とは大学のことである。大学が人前になったら(自分たちは討入りを止めて)、出家し坊主になってもよい。これは前にも申しているが、とにかく大学の安否次第なので、時期が来るまで待てば明らかになる、と言っている。内蔵助は大学が人前になる場合と、ならない場合とを考えていることが分かる。

「第一次東下りから円山会議前までの史料」

内蔵助は元禄十四年十一月三日に江戸に入った。ここで泉岳寺に墓参、急進派の安兵衛らを押さえたり瑤泉院に会つたりしている。瑤泉院との話しは、後の元禄十五年十一月二十九日付の手紙の中で述べるが、十二月五日に用事を済ませて山科に戻る。十二月十一日には上野介が隠居し跡を左兵衛が継ぐ。これについて寺井玄溪へ十二月二十五日付の手紙を送っている。

「吉良氏事今月十一日隠居、跡め無相違一段首尾好被仰付由申来候、此上とかく了簡も無之事に候、彌存立の外無之候」

上野介が隠居し、左兵衛が跡を継いだことによって、大学が人前になるための二つの条件の内の一つである上野介の処分がなくなつたのである。そのため、内蔵助は「彌存立の外無之候」、いよいよ上野介の首を討つしかない、と言っているのである。

内蔵助は安兵衛に対して、再三、大学の処分が決まるまでは早まって行動に走らないよう諭している。その都度安兵衛は、一先ず納得するが、また、暫くすると早く討ち入るべし、と催促を始めるのである。その中で、内蔵助が安兵衛を諭した手紙がある。元禄十五年二月十六日付の安兵衛宛の手紙である。

「木挽町御開門にて候はば、拙者早速罷下、存念之趣申上、我々御同事之思召に候はば、一入本望之押立、御下知以死を安可仕候」

木挽町とは大学のことである。大学の閉門が解かれたら、自分は直ちに江戸へ下り、自分の討入りの考えを伝え、大学が同じ考えであつたなら、大学の指揮の下に討入りを決行し死ぬ覚悟である、と言っているのである。

安兵衛の討入りにはやる気持ちはますます増大していく。ついにはなかなか腰を上げない内蔵助を外して自分たちだけで討入りをしようと決心するまでにいたる。この時期に内蔵助から安兵衛宛に元禄十五年五月二十一日付の手紙を出している。

「当年中御沙汰も無之候はば、来三月には拙者共罷下り可得御意候」「前々申通、□□赤穂離散以後、

右之覚悟勤仕罷在候。三月迄御沙汰も無御座候得ば、其上いつを目当に相待可申心底毛頭無御座候」

□□は字が不明で空白部分。元禄十五年中に大学に沙汰がなければ、来年の三月には関西にいる我々は江戸へ行く。前から言っているように、赤穂を離れた時からこの覚悟で、来年の三月までに沙汰が無くともこれ以上のばすことはない、と書いてある。これまでの幕府の例からみると、大学に沙汰が下るのは二年以内であろうから、元禄十六年三月まで待つて、それでも沙汰がでなければ、それ以上待つことはない、討入る。と決意を述べているのである。

「円山会議から江戸集結までの史料」

元禄十五年七月十八日に幕府から大学閉門の解除、広島本家で面倒をみるよう沙汰が下る。この時点で、大学が人前になるための二つの条件は全て否定されたことになる。残すところは、討入りしかなくなったのである。七月二十八日に関西に来ていた安兵衛も含めて十九名が京都円山の重阿弥に集合、そこで討入り決行を決めた。

討入りのため関西にいる同志が次々と江戸へ向かった。その中で大高源五は母に宛て、元禄十五年九月五日付の手紙を出している。この手紙は単に源五の心底を述べたものとしてだけではなく、この頃、関西にいた同志がどのように考えていたかを知るよい史料である。

「それゆえさつそくかたきの方へとりかけ可申ところ、大かく様へいもんにて候へは御めん被成候

時分、もしや殿様御あと少にても被仰付上野介殿方へも何とそ品もつきて大学様くわいぶんよく世間もあそハし候様二も罷成候ハバ、との様こそ右之通二候とも御家は残申事にて候、しかれハわれわれは出家しやもんと成り、また八自がい仕候而もいきとをりハやすめ候ハんと此節まで口おしき月日をもおくり候所に、そのかいなく安芸国へ御座被成候」

直ぐにでも上野介を討取るべきであったが、大学が閉門になった。閉門が解かれて少しでも領地をもらい、上野介も処分され人前になれば、内匠頭は切腹して果てたが家は残る。そうすれば、我々は出家するなり自害するなどして、殿様の憤りを慰めようとこれまで過ごしてきたが、その甲斐も無く、大学は広島へ行くことになってしまった。

このように源五は言っている。これは内蔵助が言っていることと同じで、同志の多くは内蔵助と同じ考えであったことがわかる。内蔵助が安兵衛に送っている手紙に書かれていることは、単に安兵衛を押さえるために、一人口先だけで討入りをほめかしている訳ではなく、関西にいて内蔵助と行動を共にしている人々は同じ考えだったことがわかる。

これだけ何度も何度も内蔵助は、自分の心は城明け渡し時から同じで、上野介の首をとること、お家再興のことを考えていたと言っているのである。しかも、大高源五など他の同志も同じ考えだったのだ。これがどうして「討入りなどは念頭になかった」「当初はほとんど賛同者もいなかった」などとなるのか。

円山会議で討入り決行を決めたのは単に、討入りのための条件が整っただけなのだ。

「討入り直前の史料」

討入りが決定し、同志が江戸に集まってきた。上野介の在宅、屋敷の様子などを調べる反面、内蔵助らは知人に宛て、暇乞いなどのための手紙を数多く出している。その中で、いくつかの注目すべき手紙がある。

元禄十五年十一月二十九日付の内蔵助から落合与左衛門宛ての手紙。

「去冬得御意置候通、去春於赤穂預り候御金去年已来一儀之用事二差遣申候様子委細帳面二相認候通御座候」「我々儀去冬御物語申候趣二付同志之面々申合京都退出申候」

元禄十四年の冬に同意していただいたとおり、去年の春赤穂で預かったお金は一儀の用事に使わせてもらった、詳細は帳面に記してあるとおろし。去年の冬に話したように、同志の面々は申し合わせて京都を出発した、と書いている。元禄十四年十一月に内蔵助は江戸へ来て、瑤泉院と会っている。この時内蔵助は、城明け渡しの際に残った清算金六百九十両を討入りに使うことこの了承を得ていたのである。

〔註〕「大石内蔵助最後の密使」中島康夫 三五館 2000年11月3日

元禄十五年十二月九日付の内蔵助から落合与左衛門宛の手紙。

「此間書状ヲ以去冬御約束申候帳面書付等一箱進之候、定而御披見可被成候」

この間(十一月二十九日付)の手紙で、去年の冬約束した帳面など一箱送ったが、見て頂いたことと思ふとある。内蔵助は何度も去年の十一月に江戸へきた時に、瑠泉院に討入りを約束したこと、そのためにお金を使ったこと、それを記した帳面のことを言っているのである。

元禄十五年十二月十三日付の内蔵助から恵光、良雪、神護寺宛ての手紙。

内蔵助は討入り直前に、赤穂の寺にこれまでのことなどを記した別れの手紙を出している。そこに次の事が記されている。

「良雪様へ去年以来ノ御ものかたり失念不仕日々存出し、此度当然之覚悟ニ罷成忝次第御座候」

良雪さま、去年お話されたことは忘れたことはなく、日々思いだしていました。これによって、この度の討入りの覚悟が決まりましたとある。赤穂城引き渡しの頃、良雪和尚と内蔵助は対談していた。そこで、良雪が内蔵助に話したことが、この度の討入りを決心させたというのだ。ここにも赤穂城引き渡しの時には、すでに討入りを決心していたことが書かれているのである。良雪は禅宗の僧侶なので、全て(命)を捨て去れば何事もできる、ということを書いたのではないかと、考えられている。

【おとめ】

大石内蔵助の考えを時期毎にまとめると、次のようになる。

(一) 元禄十四年四月赤穂城明け渡し頃

上野介を討つことと、浅野家再興の両方を考えていた。ただし、単なる浅野家再興ではなく、上野介も幕府から処分を受けるといふ条件付きである。大学が人前になれば、出家または自害、人前にならなければ上野介を討つ、という考えである。

(二) 元禄十四年十一月以降元禄十五年七月円山会議前まで

吉良の隠居が決まり、討入りのタイミングは浅野大学の閉門が解かれる時。討入りは大学を頭にして行うこともあり得ると考えている。

(三) 元禄十五年七月円山会議

浅野大学の開門、広島浅野家での引き取りが決まったことで、討入り実行条件が整い、討入り決行を決めた。大学を頭にするには、大学が広島へ行くためになくなった。

内蔵助が城明け渡しの時から、上野介を討つつもり、と言っているのは、安兵衛を押さえるための方便でも、討入りが自分を中心に行われたことを後世に残そうとして打った手でもなんでもない。赤穂城明け渡しの頃から、上野介を討つことを考えていたのである。

全国義士会連合会

北海道義士会	会長	北谷文夫	TEL 0125-53-3513	北泉岳寺内
笠間義士会	会長	塙 東男	TEL 0296-72-0090	真浄寺内
京都山科義士会	会長	杉浦治郎右衛門	TEL 075-581-5645	大石神社内
大阪義士会	会長	北川喜久造	TEL 06-6771-4451	吉祥寺内
京都義士会	会長	橋本一妙	TEL 075-771-2244	本妙寺内
赤穂義士会	会長	豆田正明	TEL 0791-43-6848	赤穂市役所内
赤穂義士顕彰会	会長	飯尾義明	TEL 0791-42-2054	大石神社内
豊岡義士会	会長	友田英弥	TEL 0796-22-5097	
忠臣蔵を守る会	代表	若林誠二	TEL 03-3430-3591	
中央義士会	理事長	中島康夫	TEL 048-993-2591	